

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポルケ谷九〇四 電話(03)3377-4649

FAX(03)3299-5367

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

〈もくじ〉

■ 卷頭言	2
山花・赤松執行部は退陣せよ！	2
改憲勢力が四〇二議席にも	4
—— 連合、社会党の動揺で総保守拡大 ——	
資料1 選別された社会党系候補一覧	6
資料2 衆院選についての連合の声明	7
資料3 直ちに護憲の社会党の再建を	7
(護憲の社会党を再生する全国ネットワーク)	
◇ 座談会 選挙結果と日本の将来 (一) ◇	8
新・旧自民党とのゆ着に強い批判	12
自前の社会党をつくる努力を	12
—— 「沈みはじめた船」とわれわれの課題 ——	
天皇制、自衛隊、そして社会党	15
—— 「憲法を活かす新潟の会」交流記 ——	
職場組合員の意識はまだまだ健全	17
—— 全通全国大会に異議あり ——	
読者からのおたより	20

旬刊 社会通信

NO. 546

一九九三年八月一日

一九九三年八月一日発行

(毎月一日・二日・三日発行)

■ 巻頭言 ■

山花・赤松執行部は退陣せよ！

党再建のきびしい道に立ち向かおう

社会党惨敗によって保守勢力は強化

今回の総選挙での本質的变化は、社会党の惨敗によって保守勢力総体としては強化・拡大したことである。自民党は改選前の二二二議席に一プラスしている。過半数を割ったのは羽田・小沢派（新生党）が飛び出したからである。新生党（五五）はもちろん、日本新（三五）、さきがけ（二三）の新政党は全て保守党である。これを合計すれば三二六議席で改憲に必要な三分の二に近い。さらに中間政党的公明（五一）、民社（一五）を加え、大連合的に政治協調を行えば優に憲法改憲を發議できる議席数となる。総選挙後のこの現実には、現憲法体制における民主主義にとって極めて重大な危機的状況を迎えたわけである。保守支配層にとって笑いの止まらない最高の政治情勢である。あとは派閥的権力抗争を行っている自民党と新党等との関係改善をはかることである。

社会党の惨敗の原因は歴史的なものを含めて根深いものがあるだけにその再建は極めて困難なものがある。ここでは今回の総選挙に直接関係あることだけにとどめて検討しよう。

① 準備不足のなかで解散させられる。社会党の幹部は自党内閣を解散に追い込んだと意気込んでいたが、実際は全国的に事前の運動ができていないところが大部分であった。前々回の中曽根首相による「騙し討ち」解散と同じ状態であった（このときも社会党大敗）。不信任案を提出するからには解散は当然あると考えなければならぬわけであるが、社会党幹部の判断は甘かった。羽田・小沢派と公明党との作戦に乗せられたといえよう。

② 山花・赤松ラインの愚かな言動が社会党支持者を怒らせている。ペラペラ喋るが中味がなく、ことに誠実な重みのない山花委員長への信頼性は低い。赤松書記長は委員長以上にとどいて。街のアンチャン風であって、テレビに出てくるとチャンネルを切るという人が多い。数々の放言、失言は党を支持する人達を党不信に追い込んでしまった。赤松発言（米の自由化など）の大部分は山岸連合会長の指示によるものだが、社会党本部書記局からの情報である。Y中執（専従）が山岸会長の子分的役割をやっていて、山岸指示を赤松氏に伝えているということだ。山花・赤松の両氏の責任は極めて重い。一日も早く退陣することを願っている党员と支持者の多いことを本人に知らせる必要がある。

③ 「羽田首班説」は世論の総反撃を受けた。新生党に対する勤労国民の批判はきびしいものがある。山花、赤松発言に対して社会党支持者と党员から党本部や県本所として総支部に抗議の電話が殺到したという。

山花、赤松を先頭とする党幹部は、保守系の支持者と社会党など革新系の支持者の区別がつかないのではないか、と思う。そのことは、良識をもつ国民が田中、竹下、金丸政治をどれだけきびしく批判しているかを知らないのである。汚職政治の元凶の一人で

ある小沢一郎氏に対して、「自民党を離党したからミソギがすんだ」という赤松発言は世間を驚かせるに充分であった。人々はこの発言から社会党の国会における汚職事件の追及、ことに金丸事件に対するほんとうの姿勢を見たのであった。田辺元委員長や洪沢、左近などの代議士、そして山岸連合会長などの面々が金丸氏と極めて親しい関係にあったことを国民の多数は知っているのである。社会党への支持者は当然減少するわけである。

- ④ 革新系の支持者は、公明党・学会に対して極めて強い嫌悪感をもっている。公明の市川書記長と小沢自民党幹事長（当時）が談合して「PKO」を実現させたことを忘れていない。池田大作の独裁的支配下にある学会・公明党を助けてきた（脱税問題、宗門事件など）旧金丸・竹下・小沢のグループとは当然のこととして、「ユチャク」関係にある。羽田党首（新生党）の裏には小沢一郎元自民党幹事長がいるわけで、その小沢氏は金丸・竹下の直系であるだけでなく、本人の政治姿勢が右翼的であることに反発する人が多いのである。現に彼の最近の著書では自衛隊問題や海外派兵に限らず消費税も10%への引き上げを考えていることが記されている。新生党は事実上小沢の党であるということは党内でも党外でも認めている。この党とどうして連立政府が組めるのか。田辺派の改革議連は別として、公明と新生と連立すれば泥沼の中に引きずりこまれ、社会党はもう勤労国民に見捨てられるであろう。

- ⑤ 政治改革という彼ら（非自民勢力も自民も同じ）の中味は選挙制度を「小選挙比例代表並立制」にしようということである。これによれば社会党左派と共産党はヒトケタの議席に押し込めることができ、保守二大政党制が定着すると読んでいる。新生党と公明（学会）党は選挙協力で勝つ選挙が多くなるようすでに話合いが進んでいるのである。社会党が反対しても押し切るつもりのようなのだ。日本新党は小選挙区制になれば比例の分で現在以上確保できるつもりでいる。したがって一番不利なのは社会党・共産党である。こういう条件と各党の関係のなかで連立政府に社会党が加わればいよいよ埋没して完全に政治的生命の終わりを迎えることになるだろう。

山花・赤松執行部の退陣を求める

山花・赤松執行部に退陣を求める声は一日一日と増大している。歴史的敗北をし、党をかたてなく窮地に追い込んだ責任は極めて大きい。都議選の責任も加わるわけで直ちに退陣を表明すべきである。

山花氏らは非自民の連立政府を成功させなければとっているが、連立政府に加わって何をやるうというのか。政治改革イコール選挙制度の改悪に賛成するのか。社会党つぶしの選挙制度に賛成して自らの首をしめようということにはなるまい。郵政などの民営化をもたらず「行政改革」も連立政府は打ち出すであろう。税制改革となれば消費税率の引き上げも必至である。これにどうして社会党が賛成できようか。

今社会党に必要なことは、党再建をどうして行うか、全党の論議を巻き起こすことである。執行部は責任を明らかにすると共に、93宣言を白紙に還えずことである。そして護憲の党、勤労国民の党であることを改めて明らかにし、実践のなかで国民に奉仕する党をつくることに全力をあげるべきである。

（社会通信政権研究班）

改憲勢力が四〇二議席にも

——連合、社会党の動揺で総保守拡大——

自民党の分裂と「政治改革」論議、体制矛盾を隠蔽する安全弁としての「保守二党論」などのキャンペーンが政界・財界・マスコミをあげておこなわれる中で総選挙がおこなわれ、日本社会党は六四議席減の七〇議席にとどまり惨敗しました。千葉県でも「無風選挙区」の第三区を除いてすべて敗北しました。

選挙結果Ⅱ総保守のとてつもない拡大

(1) 選挙結果は、自民党と旧自民党グループだけで三三六名を占めており、これに公明、民社を加えれば四〇二名に達します。「改憲・武力国際貢献派」が、五一一議席中で約四〇〇議席を占めるという状況になりました。

「今度の選挙は総保守のとてつもない拡大だったのではないか」(7/19「朝日」論説)という指摘が選挙結果を正確に表現しています。

社会党が、つくられた「新党ブーム」の中で埋没し主体性を失って、「政権論議で舞い上がって」、右顧左弁に終止した結果、「総保守のとてつもない拡大」を招いたのであり、改憲勢力の拡大を招いた責任の大半は社会党にあります。柳田祥子候補をはじめとして、「護憲派」候補の奮闘も社会党に対する広範な不信感を乗り越えることはできませんでした。

(2) 選挙結果についての財界の反応は、「政治改革」をめぐる日本支配層の今後の動向を示しています。即ち、「保守勢力が全体として増えたことは歓迎する」(経団連)、「将来の二大政党制に移行していく大きな足がかりができた」(経済同友会)、「政治改革をきちんとやって、もう一度選挙を」(日経連)、「今度こそ政治改革を實行してほしい」(日本商工会議所)などの発言があいついでおり、自民単独政権、自民プラスアルファ政権、「非自民・非共産」連合政権など、政権形態のいかんにかかわらず、新政権のもとでだちに、小選挙区制を軸にした選挙制度改革の実現をはかり、その上で改めて衆議院を解散して本格的な政界再建・保守二党体制の構築をすすめるという青写真が描かれています。

新生党・日本新党・「さきがけ」は、田中角栄・金丸信・小沢・羽田とつづいている金権政治の疑惑とともに、自民党と「双子の関係」にあり、彼らが主張する「改革」が保守の既得権益と金脈温存をはかるものであることは明白です。財界と一体となって「新党」ブームをあおったマスコミも選挙が終わったとたんに「新生党も下半身は自民党といっしょだ」(「朝日」)と論評する状況です。

このような「新党」と「政界再編」をめぐる情勢の背景について討論を深める必要があります。自民党はもちろんのこと、「新党」と、公明・民社が教育基本法改悪を含む「教育改革」推薦勢力であることも周知の事実です。

社会党Ⅱ羽田グループと手を結ぶなんて

(1) 六月下旬におこなわれた東京都議会選挙でも社会党は惨敗しましたが、それに先立っ

て五月に「連合」の政治方針と社会党の「九三宣言(案)」が発表されました。これらは、安保・自衛隊・原発の容認、「安全保障基本法」制定による自衛隊の海外派遣・武力国際貢献の容認、選挙制度改革(小選挙区制導入)などを共通にして、現状追認を基礎に憲法改悪へ道をひらくこうとするものです。「連合」の政権方針は一〇月の連合大会で、社会党「九三宣言(案)」は一二月の党大会でそれぞれ正式に決定されようとしています。

労働運動と一体的に社会党の変質、解体を意味するこれらの「方針」「宣言」に反対し、撤回させなければなりません。

(2) 山花・社会党委員長と羽田が握手する光景、「羽田首相」論、「小沢のけじめ問題は細かな小事」だという赤松書記長発言、自民党の基本政策(安保・外交政策など)の継承の合意をした「五党首会議」などは、社会党に対する不信感を決定的にしました。

選挙期間中、「友人・知人紹介カード」とともに「あまりにもジグザグコースをたどりすぎてわかりにくい」「社会党の路線転換は間違いであり支持できない」などの声が寄せられました。

(3) これらに加えて、一区を含む数名の候補者が「平成維新の会」の推薦を受けたことは、社会党に対する不信感を増幅させるものでした。

「連合」―過剰介入に強まる批判

「連合」の山岸会長を中心にして、「政界再編」に対する積極的対応、自民党の一部や新党との連立政権論、羽田新党の金脈派閥政治を免罪する一連の発言は「連合」の政党に対する「過剰介入」として組合員の批判はつよまっています。

賃下げ・首切り合理化のもとで資本と対決すべき労働運動の責任を放棄して、労働運動を資本の手に売り渡し、「政治屋」として狂奔する連合幹部の存在は、組合員との乖離をますます大きなものにしていきます。

さらに、「連合」は社会党候補者を「選別推薦」し、千葉県では第四区の柳田祥子候補を推薦しませんでした。また、「連合」傘下の主要単産である電機連合・鉄鋼労連・全電通も社会党「左派」を選別する一方、新党候補を推薦しました(資料参照)。こうした「連合」の社会党解体に積極的に加担する動きに対して、多くの職場組合員は距離をおきつつあります。

「連合」は、七月一日「第四〇回衆議院総選挙の終わりにあたって」と題する声明を発し、この総選挙を「新しい時代の幕開け」として評価しました(資料参照)。このような「連合」の態度と策動は、もはや「労働者のナショナルセンター」の名にまったく値しないものです。

当面のたたかい―社会党再建にむけて

(1) たたかう労働運動の再構築をめざして、いっそう努力をつよめ、具体的な闘いの展開を通して、職場からの団結づくりをすすめることが重要です。そして、「連合労働運動」からの自立を労働運動のすべての分野で追求することです。私たちの運動の推進と一体的に今次総選挙の総括をすすめる、労働運動と政党の関係、政治闘争のあり方について、積極的な討論を組織することが重要です。

(2) 総選挙直後から、「連立政権」構想などと関連して社会党の完全な変質を成し遂げようとする包囲網がいつそうつよまっています。私たちは、金権政権の本流である羽田新党などの「連立」などは断じて容認できません。社会党「九三宣言(案)」も撤回すべきだと考えます。「連合」の政治方針案も同様です。

(3) 私たちの努力にもかかわらず、社会党が「総保守体制」にとりこまれ、「もうこれ以上社会党を支持するわけにはいかない」「もうこれ以上社会党の黨員でいるわけにはいかない」という局面が訪れることも想定しないわけにはいきません。しかも、その局面がきわめて早く訪れる可能性があります。その局面に対応する準備をはじめなければなりません。

とりあえず、「社会党の再建をめざす全国ネットワーク」の形成に着手しました。九月四日(土)にシンポジウムを開催する予定です(資料参照)。状況によっては「社会党の再生」ではなく「新たな結集体」をつくることも必然の課題となります。あいまいな妥協を重ね、「機関中心主義」「組合民主主義」を名目に、結局「総評」解散を許した愚をくり返してはなりません。

憲法擁護、平和、民主主義、人権、教育、環境、福祉などの課題をはじめとして「働く者が主人」の社会を築くための私たちのたたかいは決して途絶えることはありません。「NEVER GIVE UP」を合言葉に仲間達の同志的討論を深め合うことを心から期待します。

資料(1) 選別された社会党系候補一覧

◆ 電機連合(六月二十九日)

埼玉	①	和田静夫
新潟	②	吉田正雄
東京	②	上田哲
東京	③	斉藤一雄
東京	⑦	常松ひろし
神奈川	②	岩垂寿喜男
兵庫	①	岡崎宏美
広島	①	秋葉忠利
広島	③	小森たつくに
山口	②	小沢克介
福岡	④	中西績介
熊本	②	馬場昇
鹿児島	②	新盛辰雄
長崎	①	田口健二

◆ 全電通(七月二日)

埼玉	①	和田静夫
東京	②	上田哲
東京	③	斉藤一雄
東京	⑦	常松ひろし
千葉	④	柳田祥子
神奈川	②	岩垂寿喜男
新潟	②	吉田正雄
岡山	①	谷村啓介
山口	②	小沢克介

◆ 鉄鋼労連(七月二日)

兵庫 ② 土井たか子
(岩垂寿喜男候補らは従来から推薦されていない)

資料(2) 衆院選についての連合の声明(九三・七・二八)

自民単独・長期政権にピリオド

1、第四〇回衆議院総選挙は終わった。今回の総選挙は、言うまでもなく二一世紀に向けたわが国の政治のあり方を方向づける重要な選挙であった。連合と構成組織・地方連合会は、今次選挙を政権交代、政治改革の断行、政策制度の改善の三つを目標とし、これら実現の絶好の機会としてとらえ、選挙支援に全力を挙げた。

2、選挙結果は、連合と協力・協調関係にある政党のなかで議席を減らしたところがあることは、極めて残念であるが、自民党の過半数割れを実現し、自民党単独・長期政権にピリオドを打つことができたことは、新しい時代の幕開けといえる。

3、連合は、自民党に代わる新しい政権の実現を強く求める。そして政治改革の断行、景気対策をはじめとする当面の諸課題の解決に全力を尽くし、国民の強い期待に応えるべきである。

4、連合は、この総選挙にあたり、候補者の推薦・支持をはじめとする選挙協力については、構成組織の判断に委ね、連合と構成組織・地方連合会、構成組織間等の選挙協力の調整、行動に取り組んだ。この間、棄権防止、政策制度の改善・全国キャンペーン等を広範に展開した。

5、連合は、今次選挙の体験を活かし、「連合の政治方針」の討議をすすめ、新しい時代に向けた方針を、第三回定期大会で確立する。

資料(3) 護憲の社会党を再生する全国ネットワーク(九三・七・二〇)

直ちに護憲の社会党の再建を

党员・支持者の皆さんへのアピール

一、社会党は国民の厳粛な批判を受けました。この間の護憲の信念のゆらぎと、無原則的な「連立政権」協議に対する国民の批判に謙虚に耳を傾けることから、党再建にあたらねばなりません。再建されるべきは、他でもなく護憲の社会党です。

一、再建は急がねばなりません。明確な憲法見直し、大企業直結の総保守勢力だけで三分の二の議席を占める戦後最悪の反動的国会があらわれました。改憲をみすえた次の攻撃が直ちに加えられるでしょう。九五年国連安保理常任理事国入りをめざし、自衛隊の海外派兵の一層の合法化、PKO法見直しなどが政治日程に上ってくるでしょう。どのような政権になろうとも社会党をまきこんだ保守二大政党制をめざし、小選挙区制を主体とした選挙制度改革が強行される危険は強まっています。

さらに、年金・福祉制度改革や消費税率アップなどがたくらまれ、教育の反動化も必至です。これら総保守体制下のたたかいは、どれも切迫しています。

一、議席は小なりに、闘い方があります。参議院社会党の奮起も期待されます。八六年同日選挙で惨敗した後、土井委員長のもとで院外の大衆運動を力に売上税を廃案に追い込みました。この間の党の基本政策へのゆらぎを直ちに反省し国民を信頼し、旗幟鮮明に

闘うほかに活路はありません。

総選挙の深刻な結果を見て、労働者、市民、学者文化人、労働組合から、民主主義と人権と働くものの諸権利についての強い危機感も生まれてきています。これら心ある人々の気持ちに、社会党が応え、ともに闘う姿をとりもどしましょう。

一、そのためには、山花委員長以下執行部が明確に責任を取られるとともに、無原則的な「連立政権協議」に与してはなりません。惨敗した以上、社会党の要求が反映される「連立政権」はあり得ず、むしろ小選挙区制主体の選挙制度改革をはじめとする悪政の責任をわが党におわされます。潔く野に在り、ダメなものはダメと闘うことのほうが、はるかに反自民の政治改革を推進できるのです。

しかし連合山岸会長をはじめ一部の人は「連立政権に加われ、そのために」党名を変え、基本政策を転換せよ」と、まだ繰り返しています。これを許してはなりません。一、つくりだされた「総保守」体制は、まだ安定していません。その多くは虚構です。金権腐敗の一扫か大企業との癒着か、生活防衛か弱者切り捨てか、護憲か改憲か、これらの真の対立点が広く気づかれることによって護憲の社会党が再生し前進するときは必ずくると確信します。

一、自衛隊合憲論など護憲の姿勢のゆらぎをみせた「九三年宣言案」は、党内論議をするまでもなく、都議選と総選挙によって支持者から不信任をうけました。用済みとなった原案は直ちに撤回し、護憲の党再生の方針を全党的に討議し国民の前にあかししましょう。

全国の党員、支持者の皆さん！力を合わせて結党以来の危機を、そして迫りくる憲法の危機を打開しましょう。

◆座談会Ⅱ選挙結果と日本の将来(一)◆

新・旧自民党とのゆ着に強い批判

第四〇回総選挙をふりかえりつつ

第四〇回衆院選は総保守三三六議席、改憲勢力四〇二議席との結果となった。保守陣営の権力闘争に飲み込まれた社会党議席はわずか七〇。結党以来の大敗北となった。

選挙を手伝った感想を一言でいえば固い社会党支持票に「羽がはえている」、みんなどこかへ飛んでしまっているということだった。社会党員ですら投票所に向くのがおっくうになる、そんな状況だったのだから、この結果は当然だったのかもしれない。

第一線で選挙戦をたたかった仲間から、選挙戦での印象、敗因、これからのわれわれの進路について話し合っていた。 (編集部)

司会 みんなビックリの選挙結果だったと思う。ある程度は予想していたが、「これほどとは」というのが感想だろう。その原因について選挙戦での印象から語ってほしい。

護憲いわない社会党なんて

A 私の場合職業がら町内会、後援会等、街の人とつきあう機会が多い。そこで感じたこ

とをまず申し上げたい。私の支持者でも共産党に流れた傾向がある。電話入れますね、返ってくる答えは「あなたは信頼してる、だけど衆議院は共産党に入れる」というんだ。その理由は「戦中派じゃないが、戦争でいたためつけられた経験をもつ。いわば戦後生き残り派だ。ところが田辺さん以降の社会党は根本的におかしく、波長が合わない」というの。これはここ数年の傾向で、社会党を革新として支持できないとの雰囲気がつくられた。

さらにこういう意見もある。「社会党は山岸さんという人にいいように動かされている。この人たちと社会党とは考え方が違うハズ。おかしいけどなぜそうなるのかよくわからんよ。三十数年社会党に入れてきたけど」と。「護憲をいわない社会党では支持しない」とみんな同じことをいう。この流れを変えるのは容易じゃないと思う。労組にオンブにダッコだったつけが、総評消滅、連合結成でいっきよに回ってきたという感じだ。ほくも落ちないようにどうするかと今、気分を引き締めているところです。

護憲派の存在をもっと強くアピール

司会 東京二区でたたかわれたBさん。どうですか。

B 今度の結果でまず考えることは、山花、赤松を批判するより、党内左派の自己批判が必要だと思う。土井さんが田辺、山岸によって委員長から放逐されて以降の社会党は惨胆たる状況ですよ。田辺では都議選、総選挙はたたかえない」と山花・赤松執行部が誕生したわけだが、三宅坂界限では「世の中に 春は来れど 三宅坂 山に花なく 赤松は枯れ」とのザレ歌がささやかれるほどだった。

けれど、護憲派といわれる議員もわれわれも、党の現状を直接国民にアピールする努力を怠った。上田さんなどは党内からみれば護憲候補の典型だったが、国民からは社会党の候補にしか映らない。だれそれが社会党の現情を憂え、党内で奮闘しているなんて見分ける支持者はほとんどいない。

小沢・羽田と手を組むなんて

羽田と握手する姿を国民がどうみるかなんてこの意識も弱かったんじゃないでしょうか。だから後半戦になってあわてて「護憲派です」とのワッペンをはる女性候補者がいましたよね。大衆のこわさを知らないという気がつかない、もつと国民のなかにアンテナを高くすることが必要だ。

司会 二区ではさきがけでしたか、二六歳のアンチチャンが通った。

B 毎日、雨の中マラソンやってただけ。だけどフラフラしてる社会党よりもマシとうかつちゃった。社会党全体が見放されてるとの印象です。

C ほくも東京の選挙区を手伝ったが、まったく同じ。「護憲はどこへ行っちゃったんだ。あなたの推す候補が何を言おうと社会党だろう」と。社会党はダメ、何やってんだ」というんだな。全力をつくしたけど結局〇・一%の差を詰め切れなかった。

D 電話やって羽田首班論への批判は本当にきつかった。「ごめんさい」という他ないもの。山花・赤松執行部の責任は重いと思うよ。

B それを徹底的に批判し、「真の社会党ここにあり」と、国民にアピールできなかったわれわれにも反省点は多い。

E 支持者も社会党から離れたが、選挙区によっては活動家がヤル気を失ったところも多

いね。東京七区などはたとえ敗れたとはいえ、前進への芽があるし育った。ところが、暗いところも少なくない。左派の戦線をどうつくるか、課題は大きい。

労働組合は三つに分解

司会 もう少し現状をご報告いただきます。Eさんが今おっしゃったことはメインのテーマですが、千葉のFさんいかがですか。

F みなさんと同じでずいぶん難儀でありました。紹介者名簿依頼の用紙の「ご意見を」の欄に「あっちへフラフラ、こっちへフラフラ、なんだ」と書いて送り返されたりしてね。

千葉は一勝五敗。通ったのは無風区といわれた三区だけ。連合は四区の女性候補を選別した。労働組合選対のことがこれまでふれられていないようだから、その感想です。

労働組合と社会党の選挙のあり方、三つに分かれてるように思う。まず連合だが、連合が支持・推せん方針を指示しても、対当局、資本との関係でこれをうけつけないグループね。もつとはつきりいえば労働組合が実質崩壊し、資本・権力とグルになったところ。二つは党员協がまだ健在で、従来どおりの労組選対としてフンバリをみせたところ。三つは、自前で選挙態勢をつくりあげていったところね。柳田さんところはその典型だったんじゃないか。

選挙結果で、連合内部がどう変化するかわからんけど、連合総体としてはますます御用化するだろうから、自力で闘争部隊をつくるのが課題になる。

連合に力はない

司会 関東諸県で孤軍奮闘したのが神奈川県ですが、Gさんいかがですか。

G みなさんがおっしゃったと同じように社会党が失った信頼を回復できないくらいにきびしい批判がありました。当選できたのは、さきほどAさんがいわれたような日常的な人間関係なんです。私のところどうと地域二七ブロックですが、細かく責任者を決める。党员がいらないところは支持者にというように労戦にたよらない体制をつくった。というのは昨年の市長選候補をめぐる地区労と対立しましたから。こうしてそれなりの努力をしたのですが、票はおとしの県議選の半分でしたね。

党中央の対応で徹底的に党の信用が失われた結果です。ぼくのことは支持者のみなさんよく知ってるんです。それでも「私もふくめてけしからん」となっている。でも厚木基地反対運動、生協活動でつながった方がよく動いてくれました。

選挙で選別支持が話題になり、連合が力を入れたかのようにいわれていますが、実際は大きく力をなくしていますね。戸々面接はもろんできない、個人演説会すら開けない。ただ寮の中の票をまとめるだけといった状況が顕著でしたからね。「魅力ある組合づくりが課題」と連合幹部がいうほどですから。ですから、幹部と下部の組合員に信頼関係は急速になくなってきています。

司会 いつだった候補予定者に、なぜ連合にそんなにおもねるのと聞いたことがある。彼「通す力はないが落とす力がある、これがこわい」とおっしゃるんだ。議員心理はそんなものかと聞いていたんだが、神奈川県では選別された候補がわかり、確実と思われてた人が落っこちちゃった。

G 岩垂さんね。ハッキリした発言が大きく共感を呼びましたよね。横須賀がよくまとまりました。市民も落とすな。教組も自治労もフル回転しました。兵庫の岡崎さんところの健闘には本当に頭が下がる思いですが、連合の推せん状は下に落ちていません。連合は大衆から浮いている。ですから、今後私たちの活動いかなでは護憲派が根をおろしてくる。岡崎ひろみさんのところは私たちのモデルです。みんなで兵庫の仲間に学びましょうよ。

労働運動の再生がポイント

司会 私鉄のHさん、組合員の状況は？

H イライラがつつつてますね。テレビの影響デカイですから。労働組合員の政治意識低下は労働運動の後退によるところがデカイと思いますよ。つい先日、私鉄大会が終わったのですが大手と中小の格差、地方と都市の乖離等、「共産党宣言」のいう農業と工業、地方と都市の対立ではありませんが、企業の存続がギリギリの瀬戸際に追いつめられてるところもあります。

その典型がいわゆる「反合闘争」、職場からの権利闘争の後退です。労働組合幹部の態度に（組合員は）社会党の姿をみるんです。ですから、さきほどのGさんのご指摘にもありました。このままいくと「組合はいらぬ」との雰囲気すらでてくることを恐れています。労働運動の再強化を考えなければ、この流れはとめられません。社会党再生のポイントをここに求めたいんだな。

司会 選挙選下の雰囲気、関東近辺ですけれども、つかまえられたと思います。自前の選挙体制づくり、社会党信頼回復への道、労働組合と政党との関係、護憲勢力結集の道等々の問題が出されています。

社会党をどう再生させるかという問題と密接に絡む問題です。社会党には未来がないから新しい党をという意見もあるようですが。

G 支持者からよくいわれるよ。新しい党つくった方が分り易いって。

B 土井委員長再登板論もね。

このままでは自滅の道

C 今度の選挙は自民党内経世会グループの権力闘争はじめ、「守旧」対「改革」の構図づくり、政界再編、政治改革の小選挙区制導入への誘導等、そして終盤の大々的な世論調査結果発表と、最初から最後までマスコミ主導だったよね。

自民の権力闘争が「改革」対「守旧」への誘導なんだから、これすさまじいことだよ。そのなかに社会党が完全に飲み込まれてしまった。その結果、今報告された現象が露呈したということだと思ふ。これすさまじいことだよ。だって野党は共産党以外ない。ところがその共産党も伸びてない。これで保守二党になるのかね。大政翼賛会だ。

司会 そういう点もふくめこれからどうするのか論議に移っていただきたい。（つづく）

自前の社会党をつくる努力を

——「沈みはじめた船」とわれわれの課題——

乗り組んでいた船が沈みだしたら、どうすべきか？

回答は3つ用意されている。

①沖にむかってこぎ出す ②そのまままじつとしていて ③岸にむかってこぎ出す。

東京都議選の最終盤に社会党中央が打ち出した大胆な路線変更は、参院選で傾きかけた船に追い打ちをかける嵐となつて、船の被害を甚大なものにした。

船は沈み始めた。そして準備不十分のまま、内閣不信任案提出、解散・総選挙へと突入した時、党中央は、このまま沖に向かってこぎ出す道を選択した。

むろん、岸に戻るより、沖の島にたどりつく場合が近ければ、沖に出る選択は良しとされる場合もあるだろう。その見通しもつかないのに沖に出るという選択は、やっつてはならぬ選択である。

選挙期間中のPKO容認発言は、船底の穴を増やした。これで「もんじゅ」推進でも言ってくれば、この船は確かに爆沈したのであろう。

乗組員の三つの選択

総選挙の結果は惨たんたるものとなつた。ところが、これでもまだ不十分と見て、さらに沖にこぎ出す様子を見れば、悲しみを通りこして、ただただあきれればかりである。

我々は、この船長と操舵士とともに沈没するのだろうか？

乗組員の選択も三つある。

①このまま船長もろとも沈没する。②船員の集会を開いて船長と操舵士を変えて、岸に戻る。③それがどうしても無理ならば、補助ボートを出して、岸に戻る。

何もせず、じつとしていてという選択は、結局のところ船長とともに沈没することになる。

今度の選挙では、護憲派も大いなる犠牲を払わされた。党中央の数々の路線変更放言を許し、いわゆる「左バネ」を効かせなかつた責任を取らされることになつた。だから、総括の主軸をここに求めることから、科学的総括運動が始まるものと確信している。

みんながあきれ船長も、操舵士も確かに悪いが、もつと悪いのは、それを知っていないがら許してきた左舷の乗組員が、任務を忘れて船体中央に寄つてきたことにあるのではないか？ 船の重心は著しく右に傾いた、そうではなかつたのか？

分裂はいけない、そのとおりだ、一般的には。船長もろとも沈没する気であると言うのも立派だが、よく考えてみると、きつとこの船長達には、特別のボートが沖合に用意されてあつて、一部の連中は、そのボートで生き延びることができ、大半の社会丸の乗組員は、その小さなボートには乗れずに海に投げ出されてしまうということも考えておかねばならない。

右傾化の進行

左翼の右傾化——これは、いろんなレベルで現れている。

連合を恐れて、従来の主張を考えなくなつた左派政治家。中には原発推進を平然と主張

するようになってしまった輩もいる。

連合内での孤立を恐れて、従来の政治方針を変えようとしている中央大単産の幹部の中にも左派と呼ばれていた人達がいる。

中央ばかりではない。各地方でも、連合推薦に絡んで、中央と同様の右傾化が進行している。

議員や組合幹部ばかりが右傾化しているというのはただそれが目につくだけのことだ。本当は、それを許している職場の左派活動家に元気がないことが問題なのだ。

職場で日々展開されている生産性向上運動の波にのまれてしまって、職場での大衆闘争がなくなっている。雇主の側のやりたい放題が放置される職場になっており、その中で活動家も黙々と仕事をこなし、組合のスケジュール闘争に身体をあけることに窮々としている。

これでは元気になるわけがない。相手側のやりすぎを問題にして、みんなが出すぎをたく、その小さな闘いを交流してゆく基本にかえらねば、元気になれない。そのためには、職場の小さな問題点を、いろんな機会に話し合うことしか方法はない。

あれこれの課題の中で、できない課題にトライする必要はない。何ならでできる力を捜して、職場の大衆の意見を大切にしながら、みんなで闘う実践を経験する——管理者と労働者の対立をまざまざと確認させられ、団結の味を知る。これでないとな元気は出ない。

思想誘導にまきこまれていないか？

思うに、これほどまでに社会党が労働者の党らしくなくなる過程で、マスコミによる教育宣伝が果たした役割は、大きな物があった。

特にPKO法案をめぐる攻防の過程でマスコミが設定した「金だけの貢献でよいのか？」という問いかけに対して「どこが悪い？」という居直りをやらずに人的貢献をめぐる軍事、非軍事の差へと収斂されていった経過を思い出すにつけ、とりあえず平和貢献を打ち出す必要はあったにせよ、南北問題についての原因究明とそれに対する方針という形で、これまで充分討論して来なかった弱点が出てしまったような気がしてならない。

金だけでどこが悪い？ という居直りは、それで終りということではなく、そこから議論を始めるといふことである。

なぜ南の途上国に援助が必要なのか？ なぜ南は貧しく、北は富んでいるのか？（南の一時労働と北の一時労働が等価交換されないのはなぜなのか？）

インドがなければ、イギリスは世界の工場たり得なかった。北の先進国は南の富の略奪によってその工業化の基礎を固めていった。

そして現状の生産力の差を前にして、北の人々が「援助」という「善意」の押しつけで、過去の蛮行へのつぐないとすると言うのは、余りに勝手な善意ではないか。

そして、援助の内容たるや、北の商品の市場開拓に使われている現状も問題であるし、何より本当に北の労働者は富裕と言えるのか？ 北の富裕なのは、労働者ではない。日本の黒字と言う場合も、それは日本の労働者の富裕を示すものではない。年金改悪、健保改悪、そして増税にうちひしがれようとしている。北の労働者にとって南の貧困は、北の労働者を搾取る余力のパロメータとして活用されようとしている。

左派の活動家は職場でもこうした点の議論を巻き起こすべきであった。

自分で整理のついていない問題を議論するということは、不安を伴うが、討論することによって見えてくることの方がいつも多いものである。結論までには達せずとも、学習研究する課題が明らかになるだけでもたいへんな成果となる。

保守二党のトリック

当面、金丸公判以降の展開によっては、企業献金と利益誘導型政治への不満はいっそう高まり、マスコミはこれを小選挙区制へと誘導するだろうが、保守二大政党政治支配の安定装置は、国民運動によって設置を阻止しなければならない。増税して福祉水準のみせかけ上の維持を言う保守党と、増税はしないけれども、福祉切上げは断行するという別の保守党のうち、どちらを選ぶかというような政治体制になったら、両方が交替しながら、増税と福祉切捨ての両方をやってしまうことは目に見えていてはいないか？

しかし、目の前で自民党が分裂してみせた簡単な実に見破れず、ますます保守二大政党への準備に組みこまれていく社会党中央を、もはや放置すべき時ではない。

「政権にすぎりつくためには、基本政策を捨て、第二自民党になれば、チャンスだ、分裂しても、それをやり切れ」と言い放つマスコミと連合に操られる人形と化した人物に非武装中立の社会党は守れない。

自民党が分裂したと言うことは、社会党も分裂させると言うことだ。独占資本とマスコミは、これに全力を傾注してくる。非武装中立、護憲の旗を守る人々が党内にいる限り、社会党の保守党化には分裂が伴う。

左派が腰くだけになれば、分裂ではなく、日本社会党の消滅となるだけだ。左派は、分裂という事態になったとしても非武装中立、反安保、反自衛隊、原発の社会党を継承する決意を、全国各地で示さねばならない。

兵庫一区は幸せ

岡崎選挙は、この逆風の中、またしても連合の横やりによって無所属出馬を余儀なくされた。

敗けられない選挙——選挙は、いつも敗けられないものだが、それを通り超して、この衆院選の岡崎選挙は、敗けられない選挙だった。

兵庫の社会党は事実上の分裂選挙を、これで三度、岡崎初当選、地方選、岡崎二期目やったことになる。その間にあった右派候補の参院選では休戦協定を結んでおきながら、今度も社会党をつぶすことにためらいのない連中が、公認を取り、社会党の路線を守る左派が無所属とされる三度目の選挙。

ここで敗けたら、全国の左派の立ち上がりに大きく影響するであろうし、それだけでなく兵庫の党建設の展望も失うことになる。

社会党員が、たとえ無所属出馬でも、労働者の政党として当り前のことを主張し、とりわけ、改憲の危機の中で平和憲法を守ると訴えて議席を得た。

辛い選挙戦ではあるが、逆に見れば、この候補を持ち、このような選挙がやれる兵庫一区は幸せでもある。ちょうど選挙戦に突入した頃、京都の友人から葉書をもたらした。その中に「今度の選挙も入れる人がいないよーん。」とあったことを思い出す。

選挙民にとっても護憲の社会党のはっきりした候補がいけないということは不幸なことである。

労働者から遊離した押しつけがましい前衛党ではなく、労働者とともに議論し、歩む労働者の代表としての左派への期待は、高まっている。

自前の社会党をつくる

はつきりと言いたいことを言う、自前の社会党を作る。それには、金も、労力もいる。しかし、それをやり切らねば、社会党の旗を守ってゆくことはできない。

国会の保守勢力の増大によって、改憲にむけた国民投票へのマスコミの教育も激化するだろうが、戦争反対の主張もまた浸透する基盤は充分ある。

護憲の国民運動の中で、自前の候補者を作り、地方選挙、国政選挙で自前の党を建設し、社会党を継承してゆく決意が左派のみんなに求められている。

そして、そのためにも、情勢についての意志統一が求められている。社会党をめぐる情勢だけでなく、先行き不透明となってきた世界についても——誰かがたたき台を示して、議論してゆかねばならない。焦らず、さりとて悠長に構えてもおれない。まさに維新前夜のようなものである。

(兵庫・F)

天皇制、自衛隊、そして社会党

——「憲法を活かす新潟の会」交流記——

当日は、皇太子の結婚式で国民の祝日になり、マスコミを通じて、全国民でお祝いしなければならぬような錯覚を抱かせ、自民党政府によってその事が強制される日でもありますので、その日に、憲法問題を始めた学習・交流の場として設定するのも意義ある事だと考えて計画したものです。

司会の挨拶に続いて、米山繁男県議より「憲法を活かす新潟の会の設立の意義、憲法九条を巡る情勢、コメ輸入自由化問題等」についての問題提起を受け、意見交換に入りました。

問われる理念と理想

*社会党は政権交替とも絡み政策と理念がゴッチャにされている。

*憲法を活かさないといけない。主権在民を無視している。原発・プルトニウム輸送の情報公開しないなど、平和問題も考えていかないと駄目だ。

*社会党九三宣言の学習会が十二日にあるが、党内よりも周りの方が賑やかだ。日本人は、外国人の参政権がないことを知らない。自治はそこに住んでる住民がつくるものだし、運動をつくっていく必要がある。七〇年安保の時に地区労青婦部の活動があり関心をもったが、今は運動がなくなっている。

*米山県議の言われた改革派・守旧派については、国鉄分割民営化も同じ。その時、国労は国賊論まで言われ、分裂までも経験した。一〇〇人も自殺、レットル貼りは怖いが闘うしかない。移動する権利としての鉄道、食糧としてのコメ問題も大事だ。

*自民党も「憲法を守る」と言うが、勝手な解釈改憲が問題。選挙制度だけ変えてもダメ。腐敗は直らない。

*天皇制廃止へ憲法一七八条は必要ない。そういう意味でこの日の設定は意義がある。日の丸・君が代問題もあり、天皇制問題での日常の活動が必要だ。

*護憲を言うが社会党が何をやって来たのか運動が見えない。国労を支援してくれたのは守旧派と言われる人達だ、今後も頑張りたい。

*自衛隊は違憲、九条を守る運動をやってほしい。県職労のアンケートでも自衛隊が必要という者も多いが、災害救助等を含めてのものだと思う。

*県職労アンケートのマスコミ報道が、誰にも相談なしに一方的に発表された。今日の集会は意義あるし、もつと学習する場をつくらなければ。

*PKO問題と改憲。「憲法を活かす」は良い事だ。「守る」となると「改憲」へもつながらかねない。天皇問題はだれもおかしいと思っている。国民ではない天皇に何億と税金が使われている。とにかく学習し、具体的な運動が必要だ。PKO問題は徴兵制にもつながっていくことを若い人達にアピールしていくべきだ。

*消防団の幹部等が、もう何十年にもなるが自衛隊で訓練しているし、子供会の体験入隊とか自衛隊と高校生の問題など、調査や取組みも必要だ。

*社会党の政策と理念が整理されていない。七〇歳位の党員の人から「最近の社会党はイヤになった」と言われた。アメリカでの高校生の射殺事件と戸締まり論。縮小すれば合憲というものが出ている。九条を守らねば。

*農業問題。山からは町に出てしまい、農地は荒れ放題。負担金がかかり整備が進まない。ますます農業が疲弊していくことになる。次の世代へつなげていくためのものが見えてこない。

*天皇制改憲は、元首制をと狙っている自民党も待ってましたとなる。社会党は、それなら現在の象徴として行くべきとなっている。

*この会の財政をどうするのか。今後の運動を進めるにも経費もかかるし、「新潟の会」からの補助はあるのか。

まずはじっくり組織づくり

(1) 時間の関係もあり、充分な意見交換にはなりませんでしたが、それぞれの立場から積極的意見をを出していただきました。

(2) 基本的には『憲法を活かす新潟の会』の「運動理念と組織」「具体的運動」の内容について、ご理解と確認をいただけたと思います。

(3) 会員の拡大について。(現在の上越地域での会員数は約六〇名)今日の参加者で会員でない人は積極的に会員になっていただきたいこと。また、それぞれの会員が今後会員の拡大に取り組んでいくことを確認いただいたと思います。

(4) 財政について。当面は、参加者の負担でやって行かざるをえないとおもいますが、『新潟の会』へ確認してみること。

(5) 上越地域としての役員を特別決めるのではなく、四人の「新潟の会」幹事の皆さんと相談しながら進めることと、名称については「上越地域交流会」として案内等を出させていただきます。

(6) 事務局については、県職労中頸城支部に置く事。ほぼ以上のようなことを確認いただいたと思います。

上越地域において、憲法を活かす運動を中心として、具体的に積極的な取り組みを進めようではありませんか。

(新潟・K)

職場組合員の意識はまだまだ健全

——全通全国大会に異議あり——

一、はじめに

全通は、敗戦後の混乱の中三万六千名を結集し、一九四六年五月三十一日はじめての全国単一組織として結成されました。悲惨な第二次世界大戦を教訓とし、反戦・平和闘争に積極的にかかわり、社会党・総評の「平和四原則」採択にもかかわらずきました。また、一九五九年の団交再開闘争では一年八ヶ月の長い闘争を闘いぬぎ、そして勝利し、「権利の全通」と呼ばれたのをはじめ、様々な権利闘争を組合員に支えられながら闘って、日本の労働運動の前進に役立ってきたことはまちがいありませんでした。

その全通も、七四年春闘・七五年スト権ストを頂点にして、資本の賃金抑制策・司法権力の反動化（七七年五月四日東京中判判決、ストライキに対する刑事弾圧を認める）によって有効な闘いを組織することができずに後退を余儀なくされ、七八年末反マル生越年闘争を最後に、七九年四・二八処分、一〇・二八確認、三〇年総括、抵抗主軸から交渉重視へ路線変更という道すじをたどりました。そして今の郵政職場は、当局の指導のもと、「職場に職員はいても労働組合員はいない」状況においつめられているといえます。これはこの間の様々な報告でご承知のことと思います。ここに至る要因はいろいろとあるでしょうが、本論ではありませんので検討をばぶきたいと思えます。

一、全通全国大会のネライは？

七月七～九日、北海道釧路で第四七回全通定期全国大会が開催されます。今大会の中心課題は、本部説明によれば「行革審動向・経営形態問題と組織財政機構の見直し」であるといっています。職場組合員からすれば、三月から実施された郵便関係労働者の四週八休時間短縮問題総括と実施後の見直し問題が焦点となるでしょう。

そしてもうひとつ大きな課題となるのが、「国の基本政策見直し」問題です。すでに四月一日付全通新聞号外で職場討議資料「NEW POLITICAL POWER」がおろされており、予備討議にふされてきたのですが、その中味は「冷戦構造の終焉は我々の基本理念・政策の見直しをせまっている。憲法問題、自衛隊、経済政策と国際協力など労働運動は新しい課題に直面している。反対を叫ぶだけでは理解も得られず何の問題解決もない」として、『国内外の情勢認識、基本政策についての討論と共に、政権可能な政治勢力の結集をめざし討論を開始する』といっています。

具体的課題については、「自衛権」は現憲法でも認められている、自衛隊は専守防衛の範囲で認める、現存する原発は容認、農産物自由化賛成、という立場をとるとしており、これはこれまでとっていた態度を一八〇度変更する要素を含んでおり、「革新勢力たる労働組合」たる姿勢を放棄し、現実容認・体制内組織にくみこまれていくことを意味する大きな問題だと考えられます。しかし当然このことは、一全通だけの問題ではなく、連合をはじめ他単産の動向や、「九三宣言」を出し、政界再編にくみこまれていこうとしている社会党の態度と大きくかわっていることは明らかです。それだけに、「シラケやアキラメ」が蔓延している職場状況ではありますが、きっちり討議し、反対の声を組織していく必

要があります。

三、職場アンケートから

全通K地区S支部執行委員会では、この四・一五職場討議資料に対して討論を重ねること、単に職場におろすだけでは討議されず、結果的に方針転換容認・組合員の「何を言っても無駄、すべて本部で決められてしまう」というアキラメを助長するだけではないかと考え、何とか反対の意見を上げるために、職場討議資料骨子・支部見解の発行、支部日刊紙によるシリーズ（一二号）を発行しました。そして一年に一度開催する「全組合員一日休み拠出学習会」の課題として、分散会でも討論し、最後に「自衛隊・安保・原発問題等の意識アンケート」をとってきました。

このアンケートは、方針転換しなければならぬとする根拠に使われる情報の中で、連合抽出調査、自治労調査が基本政策に対する現実容認が過半数を越えたと伝えられてくるのですが、自分達の職場組合員はどう考えているのか、ここを把握する必要があるとの立場から実施してきたものです。

その結果を簡単に報告すると、――

〈自衛隊海外派兵・国際貢献問題〉

- ・ 海外派兵反対、国際貢献は自衛隊とは別組織で非軍事 七二・八%
- ・ P K O法の範囲内で自衛隊派兵認める 九・二%
- ・ 軍事的役割・行動認める 四・八%

〈自衛隊のあり方〉

- ・ もっと拡充すべき ○・〇%（一名有）
- ・ 現状程度維持 一六・七%
- ・ 災害救援に再編し、順次縮小 四五・二%
- ・ 順次縮小、最終的廃止 三三・九%

〈自衛隊と憲法問題〉

- ・ 合憲 一四・五%
- ・ 違憲 六四・三%
- ・ わからない 二一・一%

〈改憲問題〉

- ・ 国際的地位確保のため改憲すべき 一二・七%
- ・ 現憲法下で国際貢献すべき 九・六%
- ・ 現憲法は平和憲法、その精神を世界に拡げるべき 六七・五%
- ・ わからない 九・二%

〈農産物の自由化問題〉

- ・ 貿易摩擦緩和のため自由化はやむをえない 一四・七%
- ・ 価格引き下げのため自由化推進すべき ○・二%
- ・ 安全な食糧安定確保のため、国内農業育成に力入れるべき、自由化反対 五四・七%

〈原発問題〉

- ・ 電力の安定確保のため原発は不可欠 六・六%
- ・ 原発は危険と思うが現状仕方ない 二五・九%

- ・原発は危険、当面生活水準が下がっても安全なエネルギー開発に力を入れるべき 六一・八%

（政治勢力結集の方向）

- ・社会党を中心に結集 二二・八%
- ・社会党を改革し、社民勢力結集 五・七%
- ・生活者視点にたった改革派新党結成 一九・三%
- ・労組は政治に介入することなく労働組合運動に専念すべき 三七・七%
- ・わからない 一一・八%

という結果になりました。年代別集計はできていませんが、討論過程の中では、三〇歳後半から四〇歳代が現状容認発言をしていた傾向が強いように感じられます（要因はいろいろと考えられると思います）。

当初このアンケートを集約するまでは、情報で流されていたような「現状容認」の数字が高く示されるのではないかと考えていたのですが、結果はまだまだ職場組合員の意識は健全であったと考えています。自衛隊違憲六八%、原発反対六二%という数字は一定の評価はできると思うのですが、事前の問題提起や分散会での討論で意識付けをした結果でも六〇%台の数字であったり、「自衛隊と憲法の関係」わからない二二%、「改憲すべきか」わからない九%等、まだまだ組合員の政治意識は高くなく、それよりも日常の仕事・ノルマで大変という状況があることも、こうした結果にあらわれていることも見のがしてはならないと考えています。

四、今後の課題

人間の意識は、周囲の状況に大きく誘導されやすいものです。特に日本人はそうした特性をもっているといえます。政党再編・新党ブームともいべき状況は、必ずや社会党にヨリ現実対応をせまり、左派の切りすてまで行きつく可能性があります。問題は、労働組合がこうした流れにくみしていることにあります。戦後の平和運動を社会党・総評が指導し、全通もその先頭に立ち運動展開する中で、職場での権利・労働条件も並行して向上してきました。その基本は、指導部が職場組合員・勤労国民の要求をとりあげ、運動に具体化される過程で組合員が運動に参加してきたところにあつたと思います。

今の運動は、「職場はそうかもしれないが、全体情勢を考慮して…」という、上部からの運動指導であり、組合員の気持ちにあわなない部分が多いため、運動に組合員が参加しなくなっています。ここが最大の課題といえます。組合員の結集しないところに運動の前進などありえません。このことを常に頭におき、学習・交流・共闘等を基本に、運動再構築を職場からかちとつていかなければいけないと考えています。

（追記）

この原稿作成中に全通全国大会が二日間に短縮されることになりました。本部自身が大事件な大会といっているにもかかわらず、「セレモニー化」した、また、ヤジなどによる不愉快な思いなど少しでもしたくない、と思っているような気がします。

この文章が掲載されたとして、活字に出される頃は全国大会は終わっているでしょう。わたしが爽快な気分になっていないことだけは今から予想ができます。その気分にめげずにかんばりたい。

（全通・M）

◇ 読者からのおたより ◇

誤字、脱字に気をつけて さまざまな角度からの情報は揺れ動く情勢にあたって、たいへん貴重です。気になることが一つ。貴誌ばかりではありませんが、最近誤字、脱字が多くなるような気がします。校正関係の仕事をしているので余計気になります。(品川・Y)

編集部より 面目次第もございません。心してはいるのですが。一回しか校正しておりませんので。さらに心します。

国鉄闘争上向きに 北海道名寄市も青々とした空に深緑が映えるもっともよい季節を迎えています。国鉄闘争も横浜人活裁判での勝利、新宿車掌区事件、東京高裁での勝利判決と少しは上向きに。JR東の株上場を控え、この攻め時に名寄闘争団もがんばります。「通信」名寄でも少しずつ増えています。激動期にあつて適切なご指導、またの御来訪をお待ちしています。ご夫婦でね！ (名寄・S)

編集部より 国鉄闘争にとって本当に大事な時期。がんばりましょうよ。「通信」ぜひふやしてください。

パンフご購入を 兵庫の婦人会議が高齢者のパンフレットを作りました。パンフの題名は「『良い嫁』と言わないで—在宅介護者百人の声」(A五版、一三二ページ)、頒価八百円です。お申し込みは日本婦人会議兵庫県本部、住所は神戸市中央区中山手通り五―二―三扇都センタービル(Ⅷ〇七八―三五―〇〇八)です。ぜひご購入を！ (兵庫・M)

編集部より 兵庫の仲間は今、党、労働運動の先頭にたつていらつしゃいます。私の父も一五年間寝たきりでした。そうした方多いのです。ぜひおすすすめします。

今の状況では選挙が心配 社会党も「自衛隊・原発容認」方針へ、労働界においても社会党有力支持労組(自治労、全通等)が相次いで同方針へ。労組が労働条件改善、賃上げもまともにできず、政治屋まがいのことをしてよいのか。選挙が心配。(全通・S)

編集部より 私たちの決断がせまられるときが近づいているように思われます。いよいよ職場、地域からの運動が問われます。

全国大会代議員に 全通大会も間近。この間青年部では「あたりまえの労働運動を闘う組織を守ろう」と討論してきています。こうした職場の声を全国大会に反映すべく代議員に立候補し当選することができました。労働者の実態をつなぎ押し上げるため。(全通・S)

編集部より 全通大会報告、職場での活動報告お寄せください。

全国の活動に勇氣 全国各地でがんばっている状況が確認でき勇氣。(北区・S)

編集部より もっともとおたよりを。みんなでがんばろうよ。

貴誌にスツキリ すつきりしない政界や経済の動きにもやもやしています。いつもはつきり言ってくれる貴誌に激励されています。(宮崎・S)

編集部より モヤモヤ吹き飛ばしましょうよ。そのためにエネルギーを貯えなければ。